

40. オオバ

一津屋はオオバと呼ぶアオジソ（青紫蘇）の産地である。かつて17軒あった促成組合も今は4～5軒。露地とハウスの話はH氏から、水耕栽培はS氏から聞いた。

シソの分類

シソ（紫蘇）は、青い葉っぱを食べるオオバ、花の部分を食べるホジソ（穂紫蘇）、梅干し漬けなどに使う紫色の葉っぱのツケジソ（漬紫蘇）の3つに分類される。

豊橋の穂ジソの花はうす紫で落花しないが、一津屋産の花は真っ赤ですぐ落ちる。また同じオオバでも寝屋川のは成長が早い。一津屋産は日持ちがよく、傷みが少ない。

20年前が最盛期

一津屋は戦前すでにオオバを作っていた人がいたという先進地。30年程前から盛んになり、20年程前には電照栽培が始まって最盛期をむかえる。オオバは連作ができ、小さい面積でもいけるので、ダイキンで土地が潰れた一津屋には適した作物だった。

露地とハウスで年中出荷

A は栽培カレンダー。露地のオオバは4月上旬に種を蒔き、半月程で移植して、7～8月が出荷期。時期をずらせて6月下旬に播種したものは9～10月に出荷できる。

ハウスの方では、8月15日に播種、8月下旬～9月上旬までに移植、10月下旬から翌年6月まで出荷が続けられる。この露地とハウスの組み合わせで年中出荷ができる。

日照時間を延ばす

植物は生長しきると花をつけ、種が出来れば葉は枯れる。オオバは葉が商品だから花をつけさせたらまずい。そこで日照時間の不足分を電灯でごまかして生長を続けさせ、葉っぱを頂こうというのが電照栽培の原理。伸び続けたオオバは草丈2mにもなる。

1日10時間も

8月10日を過ぎれば花を付けてしまうのでそれまでに点灯、冬至の頃（12月22日前後）には10時間も点灯する。6㎡に60W球を1個の割合で120～150灯を点灯すれば、温風機のファンも含めて電気代は月10万円。電気代の要らないのは6～7月だけ（H氏）。

水耕栽培を試みる

B C はS氏の水耕栽培。はじめカマボコ型の静岡式ハウスで作っていたが、熱しやすく冷めやすい。そこで屋根型の大型ハウスにしてマサ砂を20cm程入れたが、オオバはイヤジ（厭地）がないといっても少し出る。そこで連作障害の少ない水耕栽培に踏み切った。設備は既成のセットは値段が高いため、工夫を加えてS式でいった。

A

【ハウスのオオバの農事暦】

- ・ 8月15日 播種……露地……点灯（120～150灯）
- ・ 8月下旬 本葉1cm.
- ・ 9月上旬まで 移植（ハウスの中でビニールは掛けない）
- ・ 10月下旬 出荷
 - ↓ ビニール掛ける.
- ・ 翌年6月 2mぐらいになる.

B



【露地のオオバの農事暦】

- | | | |
|-----------|--|---------|
| ・ 4月上旬 播種 | | 6月下旬 播種 |
| 移植 | | |
| ・ 7月上旬 出荷 | | |
| ↓ | | |
| ・ 8月下旬 | | |
| | | 9月 出荷 |
| | | 10月 出荷 |

C

